

県立 A 大学における 2024 年度特別講義 「生涯スポーツとしてのフェンシングの魅力と 地域活性化の可能性」の報告

増田和正¹⁾, 窪田辰政²⁾

Report on special lecture entitled “Attraction and potential for regional revitalization of fencing as a lifelong sport” given at Prefectural University A

Kazumasa MASUDA¹⁾, Tatsumasa KUBOTA²⁾

1. はじめに

県立 A 大学は、学生の心身の健康維持増進に寄与することをねらいとした体育授業を開講している。同講座の中で、受講生の生涯スポーツの選択肢をさらに広げることを目的として、著者が特別講義を行った。

著者は B 高校時代より部活動としてフェンシング競技を開始し、C 大学卒業後も仕事の傍ら母校の後輩指導にあたりながら自身の練習を続け、D 県代表選手として国民体育大会に 9 回出場する等、一定の成績を残してきた。そして、今もなおベテランカテゴリーの選手として試合に挑戦し続けている。

大学生が体育の授業や部活動・サークル活動においてスポーツに接するなか、本講義におい

てフェンシングを通じて「生涯スポーツ」とは何かを学ぶと共に、著者が暮らす E 市のまちづくりにおけるフェンシングの役割について知ってもらう。それらを通して、今後の「地域活性化の可能性」について著者の取り組み事例や実体験からの考え方を学び、受講生が自身の気づきを得ることをねらいとして特別講義を行ったので、その内容と成果を報告する。

2. 講義概要

2.1. 目的

本講義の目的として、受講生に馴染みのない「フェンシング」というスポーツを様々な角度から知ると共に、生涯スポーツとしての素晴らしさやスポーツによって地域活性化がどのようにもたらされるのかについて学び、気づきを得

1) 特定非営利活動法人沼津新鮮組

Nonprofit Organization Numazu Shinsengumi

2) 静岡県立大学薬学部

School of Pharmaceutical Sciences, University of Shizuoka

る機会とすることである。

2.2. 講義の日程および実施場所

2024年6月17日(月)に著者が県立A大学に訪問し、教室で対面にて講義を行った。

2.3. 受講生

県立A大学学生で「身体運動科学」の授業を受講している食品栄養科学部・経営情報学部の1年生25名(男子9名, 女子16名)に講義を行った。

2.4. 倫理的配慮

講義後に授業評価と感想の記入を求めること、匿名化した記述データのみを使用し個人を特定する情報は一切公表しないこと、授業評価と感想を記入・提出しなくとも不利益は被らないことを講義前に説明し、同意を得た受講生から回答を得た。

2.5. 授業内容

90分の授業時間の中で、講義は70分とし、授業説明と質疑応答・感想記入に20分を使った。講義のアウトラインは以下の通りである。

- A. フェンシング競技及び「フェンシングのまちE」の取り組みについて
- B. これまでの著者の①選手②コーチ③GM(ゼネラルマネージャー・県フェンシング協会理事)としての取り組み
- C. 著者の考える「生涯スポーツとしてのフェンシングの魅力」「地域活性化の可能性」
- D. まとめ

パートAについて、まずは講義に入るにあたりフェンシング競技の説明(日本フェンシング協会, 2024)について三種目の違いや起源について分かり易い言葉で、また出来るだけ受講生にイメージを持ってもらえるように用具を受講生に回しながら説明を行った(写真1)。

1種目のエペはヨーロッパの決闘より始まり、全身が有効面であることが特徴である。

2種目のサーブルはハンガリーの馬上の闘いから始まったため、馬を傷つけないように上半身が有効面であり、かつ唯一斬ることが出来ることが特徴である。3種目のフルーレは他種目の練習用として生まれ、剣先に花をつけて白いユニフォームに色が付くことにより判定されたことがフルーレの語源であり、有効面は胴体であることが特徴である。

実際に剣やマスクを手取ることで、なんとなくでしか分からない競技の違いについてリアルに感じられたことと思う。

また、「フェンシングのまちE」の取り組みについては、2019年2月にE市と日本フェンシング協会の包括連携協定の締結から始まり、東京一極集中から地方拠点都市を作りたい日本フェンシング協会と東京オリンピック事前合宿誘致を勧めながら特色を打ち出したいE市との双方の思惑が合致し、初の協定に繋がったものである。

その取り組みについて、フェンシングのまち推進協議会が打ち出している4つの柱(沼津市, 2024)である①環境整備事業…E駅前に作った「F3ベース」を主体とした展開②裾野拡大事業…スマートフェンシング(スポンジ剣を用い開発された普及用フェンシング)を活用した学校訪問活動③シンボルフェンサー育成事業…10年間をかけてE市出身の選手を育成しオリンピックで金メダルを獲得する④大会・合宿誘致



写真1

事業…E市の施設であるプラサヴェルデ・キラメッセ、新設したE市総合体育館を活用し様々な大会・合宿を誘致していく等、について説明を行った。

パートBについては、著者の①選手②コーチ③GMの活動・経験を踏まえた説明を行った。選手時代の話については、著者が競技を始めた高校時代から大学、社会人となった現在にまで至り、また講義対象者が大学1年生であり、自分と重ね合わせて聴けるパートであることから、当時の感情を思い出しながら話を行った。その後、社会人となりD県代表として国体に9回出場し、その間ベスト8を目標とし努力を続けてきたが、一度も入ることは出来なかった。国体を目指しながら、後輩指導としてコーチとして活動を開始し、その比重は年々コーチへとシフトしていった。自身が選手として活動する時間をコーチとして高校生を指導する時間にした方が、D県を強く出来ると思ったからである。

B高校のコーチとしては、15年程度選手たちと共にインターハイを目指して土日活動を行った。D県内には部活としては4校のみで県内東部に集中している。フェンシングはルールの理解が難しく、また審判機や用具・活動スペースが必要となることから、熱心な指導者がいなければ普及しない。他県では選手で良績のあるフェンシング経験者が、学校の職員として部活顧問にあたるケースが多いが、D県内はほぼ全ての学校の顧問は素人の先生であり、熱心なOBに支えられて活動が継続されてきている。著者がB高校のコーチとなって以降少しずつ安定した成績を挙げ、毎回ではないものの県内予選を突破出来ることは増えていったが、フルーレにおいては全国の厚い壁にことごとく阻まれた。フェンシングは3種目あるものの、当時フルーレ偏重の考え方が全国的に強く、エペ・サーブルは2種目目という考え方が未だに残っていた。それはエペ・サーブルを専門的に指導出来る指導者がいないこと、また目指すべきインターハイに団体戦があるのがフルーレの

みであることが要因と考える。同じ努力をするならば、より上位進出を目指せるサーブルにと指導の比重も移していったこと、それを数年間継続していったことにより、インターハイ入賞(8位以内)、JOC準優勝・優勝、カデ代表選手輩出と積み上げていき、ついにはインターハイ全国優勝を達成してくれた。これは非常にコーチとしても自信となる結果であったが、ここでもう一つの課題が出てくる。それは、高校でフェンシングを辞めてしまう選手がほとんどであることである。強い県では全国大会で一定以上の成績を残した選手が、スポーツ推薦で大学へと進学し、また地元に戻ってフェンシングを教える循環が確立されている。または、中高一貫校や付属高校から大学へと進むルートがある。進学校であるB高校では大学でフェンシングを続ける選手が極めて少なく(県内他校においても要因は別だが、大学で続ける選手は少ない)、これでは弱いD県を強くすることは出来ないと感じコーチを後輩に譲り退くこととした。その後、当時全国唯一のサーブル専門ジュニアチーム「BDP NFC」を2017年に設立した。2名から活動を始めたチームは現在選手30名のチームとしてE市総合体育館の多目的室にて週4日活動を行っており、全国小学生大会にて準優勝を収める等の活躍をしている。

指導者・国体選手としてフェンシングに関与するなか、D県フェンシング協会の運営にも携わることが増えていったが、取り立てて全国的に目立つ様な活動がある訳ではないフェンシング後進県であった。D県を強くしたい・変わりたい一心で活動を続けていくなか、そのきっかけとなりうるチャンスが巡ってきた。東京オリンピック開催決定である。オリンピックの開催前の海外選手の事前合宿を誘致することが出来れば、地元の方々にフェンシングを知ってもらう機会が増えて普及活動も進みやすいのではないかと考えたのである。日本フェンシング協会の要職の方々と面会の機会を設け、事前合宿誘致の手を挙げたいと意向表明し協力要請を求

めるなか、複数の「アルミピスト」を所有することが必須条件であることが判明した。アルミピストとはフェンシングの試合をする時に床に設置し使用するもので、非常に高価なものである。そこで当時のE市長のもとに要望書として、オリンピック事前合宿の誘致とそれに伴うアルミピストの購入を提出し、8本のアルミピストを購入して頂いた。また、このような活動と並行して大規模イベント「フェンシングフェスティバル」を開催した。これはフェンシング協会の選手会のイベントにて、「日本代表選手が地元に来てデモンストレーションをする」との権利を得た著者が、様々な方々に相談した結果辿り着いたものである。金銭的・運営的・時間的に困難なものしかないなか、日本代表選手12名を招くことができ、イベント業者からも最大限の協力を得られてキラメッセEにて実現した。第2回は日本代表選手の親子トークショーを開催し、県内試合とタイアップして開催した。また、クラウドファンディングにも挑戦し地元日本代表選手を応援するボードを作成した。第3回はスマートフェンシング大会（スポンジ剣を使った普及のためのもの）を行い、最終の第4回はD県のオリパラ200日イベントとタイアップした形で開催できた。その労力は今思うと計り知れないものがあり、それを少しでも円滑に進めるためD県東部地域のフェンシングの普及と強化を目的としたNPO法人を設立した。フェンシングフェスティバル以外にも商店街や公園でのイベントに参加したり、他市のタレント発掘事業「ジュニアスポーツアカデミー」に加わり有望選手の発掘に努めたり、障害者施設で車椅子スマートフェンシングを行ってきた。そのようななかで、日本フェンシング協会に対して、またE市と市民に対してPRを続けてきた。その結果がE市で初の日本代表合宿（全種目）誘致・日本フェンシング協会とE市の包括地域連携協定へと繋がったものである。スポーツを通じて町興しに繋がりたいE市と東京一極集中から地方へと分散し

ていきたい日本フェンシング協会との思惑が重なったこと、そのタイミングも一致したまさに奇跡的な出会いが「フェンシングのまちE」を実現したのである。

パートCとして本講義の本題である著者の考える「生涯スポーツとしてのフェンシングの魅力」「地域活性化の可能性」について、それぞれ3つずつを挙げて説明を行った。

生涯スポーツの定義としては、「だれもが、いつでも、どこでも、気軽に参加できる」スポーツをいう。著者は本講義に臨むにあたり、全日本ベテラン選手権へ2回出場し挑戦することにより、改めてそれを体感してきた。その大会で上位の結果を残すことで世界・アジアベテランへの出場権を獲得出来ることになる訳だが、単にそこを目指すだけでなく50代・60代・70代各カテゴリーの選手の方々がとても楽しそうにフェンシングに取り組む姿とそのコミュニティが生き甲斐を与えてくれていると感じた。また、30歳以上のビギナー（競技歴3年未満）が出場できるカテゴリーもあり、社会人から競技を開始し目標を持って参加出来る大会が多くないなか、その可能性を感じた。2025年からは世界ベテランに40代以上のカテゴリーも開始されるとのことであり、著者も挑戦したいと考えている。

次に子供から大人までの循環を作るということである。昔は高校生から競技を始める選手が大半のなか、近年では全国的にクラブチームで小学生から競技を開始する選手が多い。E市でもいくつかのジュニアクラブチームがあり、嬉しいことに底辺を形作る小中学生の選手数は着実に増加している。今後はここから大学生でも続ける選手が増えて、Uターン就職により指導者として帰ってくる、そういう循環を作り上げたい。そのためにはUターン・Iターン・Jターンを受け入れられる就職先の確保が必要となってくる。これまでも協会関係の法人を中心として採用活動も行い採用実績もあるが、1社の負担にならないように協力会社を増やしていきたい。

生涯スポーツとして「する人、観る人、支える人」（スポーツ庁、2024）という観点から、受講生の大学生に少しでもフェンシングに興味を持って「観る人」「支える人」となってもらいたく、パリオリンピックの見所として注目選手を紹介した。パリオリンピックで日本の快進撃が続き、連日スポーツ新聞の1面をフェンシングが飾った。ここまでの結果を予想はしていなかったが、受講生がこの講義を機にフェンシングをしなくとも「観る人」「支える人」に一人でもなってくればこの講義をした意味がある。

「地域活性化の可能性」として、まずは現在社会問題となっている点を紹介した。勝利至上主義の行き過ぎにより、他競技では全国小学生大会を取り止める競技も出てきている。また、部活動による教員の長時間労働やパワハラ、少子高齢化の進行より部活動の地域移行が進んでいることである（スポーツ庁、2024）。著者がヘッドコーチを務める「BDP NFC」はNPO法人とスポーツジムと共同で運営を行っているが、この社会問題に対して真正面から取り組んでいる。楽しく安全に騎士道（勇気・誠実・礼儀・慈愛）を学ぶこと、一人一人の選手を大切にすることをチームの理念と指導方針として掲げている。そして、部活動対応コースを新設し、スポーツ庁のガイドラインに即した週4日・1回2時間程度を基本とした練習を行っている。そ

こでは学校や年齢を越えた繋がりを作り、競技を楽しむことから世代の代表を目指す等、多様化するニーズに対応出来るチーム作りを行っている。

次に周辺都市への広がりである。E市は担当課とフェンシングのまち推進協議会が、上述の通り活動を推進している。更に普及に広がりを見出すためNPO法人において、他市においては民間企業が運営する多種目体験型スポーツイベントに参加したり、また他市の選手発掘事業に7年間参加してきており、有望な選手の発掘の場を広げてきている。

地域活性化の可能性の3点目としては、大会誘致による経済活性化を挙げた。スポーツイベントの経済効果として、直接効果、第一次・第二次波及効果があり、子供の大会であれば家族での応援があるため相応の効果が見込める。2023年・2024年と2年連続して、E市総合体育館において全日本選手権が開催された。特に2024年はパリオリンピック後の凱旋的要素も強く、会場はかなりの一般客が観戦していた。こういった開催は地域コミュニティとしての社会的効果やE市民への心理的効果も大きかったと推察される。今後は継続安定した大会の開催をしていくと共に、E市は「世界選手権大会」誘致を目指すとしており、ハード面ではほ

生涯スポーツとしてのフェンシングの魅力②

～子供から大人までの循環～

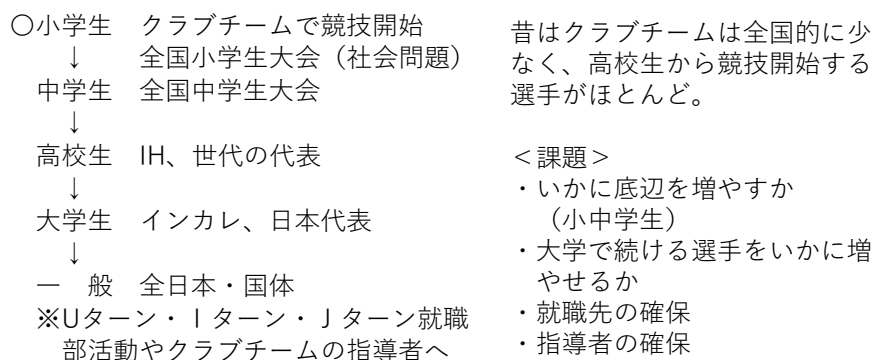


図1

地域活性化の可能性① ～BDP NFC部活動コースと地域密着化～

○部活動対応コース始動（2024年4月）

- ・水、金、土 フェンシング
- 火 トレーニング・座学
- ・学校や年齢を越えた繋がり

○活動場所の変更（2023年4月）

- ・香陵アリーナ多目的室
- ・外から観える開放的な環境



図2

ほ整っていることから、実現可能性はあると考えている。

そして、講義のまとめとして、素晴らしき人達との出会いを紹介した。強いリーダーシップで推し進めてくれたE市長、著者の熱意を感じ取って頂き最速で様々な件を進めて頂いた当時の日本フェンシング協会専務理事、実務的な様々な困難を全て乗り越えてくれたE市担当者、他にも大勢の方々の協力があり今があると考える。そしてこれまで様々な目標は達成してきてはいるものの、現在まだ道半ばであり、それはずっと続いていくと言える。夢は見るものではなく、「夢は叶えるためにある」として締め括った。

3. 講義の感想

講義後に、講義に対する総合評価を10点満点で示すと共に、自由記述による感想の提出を求めた。受講生25名から回答が得られ、平均9.2点との高い評価を受けた。以下に自由感想の一例を記載する。文意は変えず一部修正を行った。

- ・社会人になっても好きなことを続けられるのは、とてもすごいことだと思った。地域に根付いてスポーツを行うことで地域住民のコミュニティの場を提供すると共に、スポーツの普及も行うことが出来るので地域活性化に

つながる。自分のやりたいことは何なのかをしっかりと考えて、私も将来何かの役に立てるようにしたい。地元が好きだと仰っていたが、私も今地元を離れてみて地元が恋しくなる時が多々あるので、将来地元のためにできることはなにかというのを考えてみたい。

- ・今までスポーツというと大会に出場をし、勝敗にこだわる競技スポーツのイメージが強かったが、生涯スポーツのように興味から競技を開始し年をとっても続けられるスポーツがあるのは素敵なことだと思った。フェンシングがあまりメジャーでないE市で魅力を伝え普及活動をしている先生からフェンシングに対する愛を強く感じた。一生を通じて楽しめるスポーツを見つけていきたいと思う。
- ・地域活性化に関して、今までは政策に改革や地域産業を中心としたもののイメージが強かったのですが、今回の講義でスポーツを通じた地域活性化の可能性を知ることが出来た。スポーツ団体と教育機関の連携による子育て支援や大会の誘致と各企業との協働による地域経済の活性化、スポーツを軸としているからこそ期待できる心理的・社会的効果の存在もあり、今後大きな期待を寄せられるものになると感じました。
- ・生涯スポーツとしての魅力は、フェンシング

は子供から大人まで楽しめるということであり、ベテラン選手権では70代でも出場している。また、近年では日本の競技レベルが上がってきていて、パリオリンピックでメダルを獲得できるかもしれないと聞き、ぜひ応援してみたいと思った。講義を聞き、フェンシングの魅力や先生のE市での取り組みがよく分かった。「夢は叶えるためにある」という言葉はとても深い意味があると感じた。

- ・実物に触れ話を聴いているなかで、フェンシングについて興味を持つことが出来た。環境が良いものではなく、完璧な結果をなかなか出せないなかでも競技を続け、コーチという立場でも活躍していることは持続力の表れであり、今の自分では真似することが出来ない。さらにフェンシングを広める活動や取り組みを数多くしており、自分自身も熱中できることを見つけ、それに対して全力で取り組みたいと思わされた。活動が地域活性化につながり、多くの人達の協力で現状があるということを知り、自身も視野を広げ、積極的な活動をしたかった。今後の活躍を見続けていきたいと思わされる講義だった。

4. まとめ

本講義に対する総合評価が10点満点で平均9.2点であったことから、本講義は多くの受講生にとって興味深い内容であったと考えられ

る。本講義を行うことで、フェンシングについて少しでも興味を持つ学生が一人でも増えたならば著者の普及活動の意味があり、これまでの取り組みの経緯や結果が少しでも学生に響き、自ら積極的に何かに取り組んでみようという気持ちになったのであれば、本講義は大成功だったと言える。

今後の課題として、実際にフェンシングを少しでも体験出来る要素を取り入れる事が出来れば、学生自身がより身近にフェンシングを感じられる講義となると思われる。

5. 謝辞

今回、このような特別講義の講師の機会を頂いた県立A大学に深く御礼申し上げます。

文献リスト

- 日本フェンシング協会, <https://fencing-jpn.jp/>, 2024.10.14.
- 沼津市, <https://www.city.numazu.shizuoka.jp/fencing/index.htm>, 2024.10.14.
- スポーツ庁, https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413_00003.htm, 2024.10.14.
- スポーツ庁, https://www.mext.go.jp/sports/content/000021299_20220316_3.pdf, 2024.10.14.